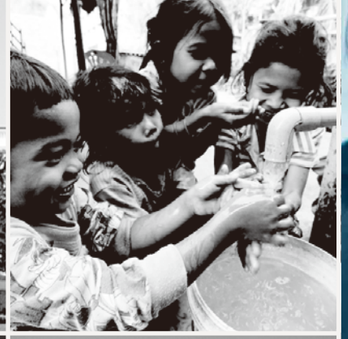
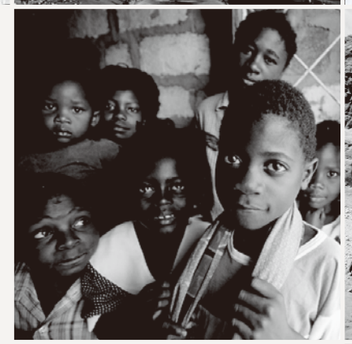
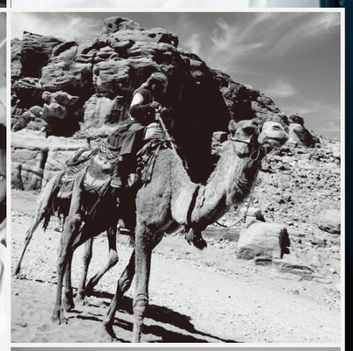






外交を支えるプロフェッショナル

PROFESSIONAL

外務省

MINISTRY OF FOREIGN AFFAIRS

専門職員採用案内

MOFA

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
Tel:03-3580-3311（代）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/

PROFESSIONAL

外交を支えるプロフェッショナル

外交の目的は、平和で安全な国際社会の維持に寄与しつつ、

日本の平和と繁栄を確保し、国民の生命と財産を守ること。

その一翼を担う外務省専門職員は、高い語学力と幅広い外交分野への深い知見を武器に、

地球上の全ての地域を舞台として活躍しています。

その壮大な使命を果たすために必要なのは、日本とその人々のために尽くそうとする情熱。

それを支える知性と冷静さ。人間としてのタフさと誠実さ。そしてあくなき好奇心と向上心。

このような使命感をもって、世界中のあらゆる現場で力を磨き、仲間とともに挑戦し、

経験を積み重ねていくことこそが、外交を支えるプロフェッショナルへの道です。

あなたも、私たちチームのかけがえのない仲間の一人として、

日本と世界のよりよい未来を創るために、外交のプロフェッショナルへの道を切り開いていきませんか。

CONTENTS

Overview	03
若手省員の声	05
研修制度	11
在外研修レポート	13
キャリアパス	15
ワークライフバランス	19
大使からのメッセージ	20
人事担当者からのメッセージ	21
新入省員/採用情報	22

Overview

外交の最前線で活躍するプロフェッショナル

外務省専門職員は、高い語学力を有し、これに関連する国・地域への、又は経済、経済協力、条約、安全保障、軍縮、広報文化等幅広い外交分野への深い知見を武器に活躍することが期待されています。海外においては、日本の外交官として相手国政府との交渉や政治・経済その他の情報の収集・分析などに携わり、本省においては、その深い知見を活かして、外交政策の企画・立案に携わります。

日本と世界をつなぐ外務省

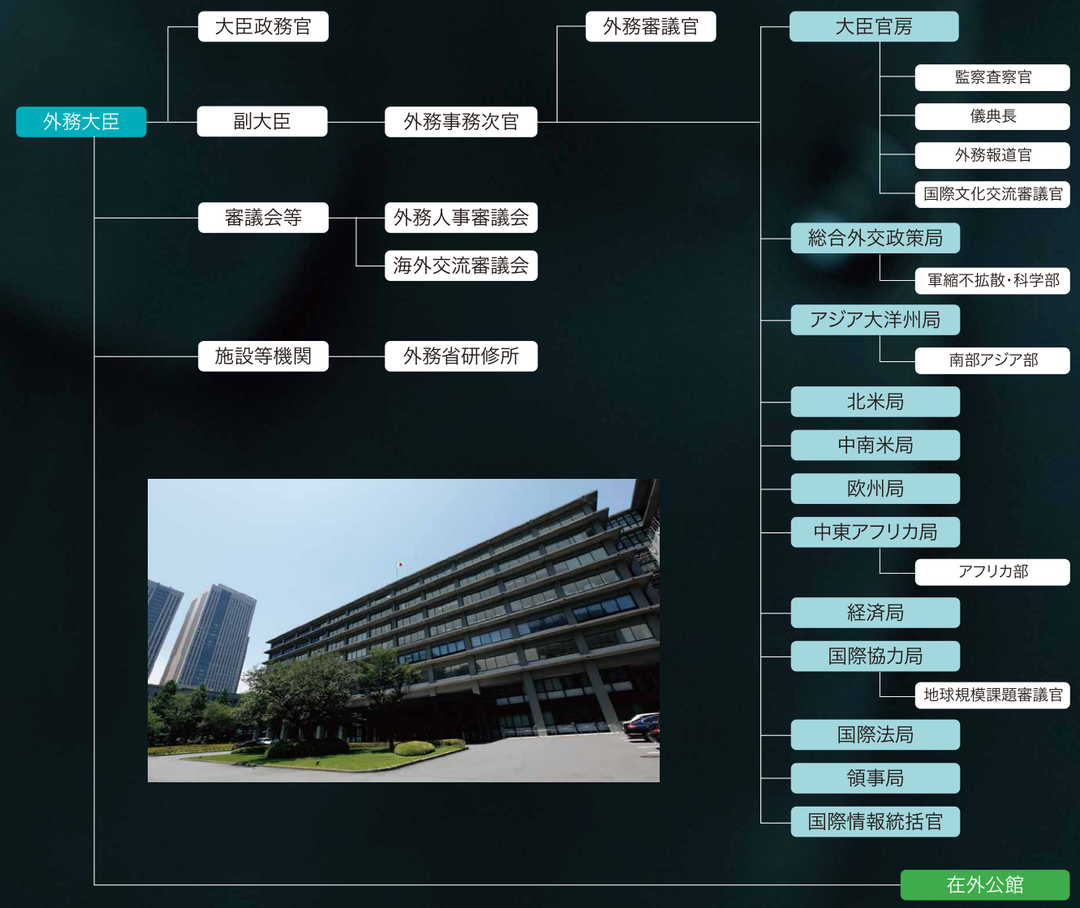
本省と在外公館

外務省は、東京・霞が関にある「外務本省」と、世界153か国に置かれている「在外公館」（大使館・総領事館・政府代表部）で構成されています。外務本省は、外交政策を企画・立案して日本外交を推進しています。在外公館では、本省の意向を受けつつ、精力的に様々な外交活動に取り組んでいます。

日本外交 5つの取り組み

1. 日本と国際社会の平和と安定の確保
2. 開発協力～世界の様々な課題の解決への取り組み～
3. 日本経済の成長と繁栄の追求
4. 日本についての理解の促進
5. 「国民と共にある外交」の推進

外務省の組織と機構



外交のプロフェッショナルとして

専門職員の役割

専門職員は、入省時に割り当てられる研修言語を駆使し、これに関連する国・地域の政治、経済、社会、文化、歴史等への深い知見を外交の現場で最大限に生かし、第一線で活躍しています。また、勤務経験を通じて得た、経済、経済協力、条約、安全保障、軍縮、広報文化等の分野での実践的な知見を武器に力を発揮することも期待されています。こうして蓄積された専門的な知識や経験に基づく能力が、外交政策の企画・立案や、外交政策推進の現場で必要とされているのです。外交の分野は大変幅広く、国際社会の目まぐるしい変化に対応していくために、外務省専門職員の役割はより重要性を増しており、これまで以上に活躍の場も広がっています。

専門職員のキャリアパス

入省後１年間の本省勤務の後、在外研修、在外公館勤務を経験し、本省に戻ってからは、おおむね５～６年ごとに本省勤務と在外公館勤務を繰り返し、本省・在外公館で活躍することになります。管理職としての資質のある者は、本省の室長、在外公館の次席等を経て、能力や適性に応じて、総領事、大使への道が開かれています。

求められる人材

日本のために働きたいという強い情熱と使命感に加え、世界中のどのような国でも勤務できる心身のたくましさ、多様な価値観を理解し受け入れることができる柔軟性と、相手と粘り強く誠実に向き合うコミュニケーション力などが必要です。特に、専門職員は、自身の研修言語を軸として国・地域への知見を深めつつ、外交のニーズに応えるために様々な分野を担当しながら、自分の知見と経験を積み重ねていくため、新しい事柄にもチャレンジし、常に学び続けていく姿勢が求められます。

研修言語
フランス語

5
年目

在外公館
在ハイチ日本国大使館　三等書記官

松浦　司朗

MATSUURA Shiro

2017年入省。
フランスで在外研修後、
2020年から現職。

「日本代表」として、ハイチの人々に寄り添う。外交の現場での奮闘が、成長の糧です。

経済協力を通じて日本の信頼向上に貢献

私は現在、カリブ海の島国・ハイチにある日本大使館に勤務しており、開発協力、総務、政務・ 経済、広報文化など様々な分野を担当しています。特に、日本はハイチに対して保健・衛生、教育、農業・食料、防災の分野に重点を置いて開発協力支援を行っており、私の主な仕事は、これらの開発支援プロジェクトの形成・進捗管理・フォローアップを、関係各所と連携しながら進めていくことです。例えば、2021年8月にマグニチュード7.2の地震がハイチ南部で発生した際には、外務本省とJICA（国際協力機構）、ハイチ政府と上手く連携し、ハイチ政府に対してポリタンクなどの援助物資を地震発生からわずか3日後に供与することができました。こうした支援はハイチ及び国際社会から高く評価されており、経済協力を通じて日本のプレゼンスや信頼の向上に貢献できることに、大きなやりがいを感じています。

若手でも様々な場面で「日本代表」に

在外では、大使館の外での業務も少なくありません。例えば私の場合、ハイチに対して支援を行っている他の国や機関との会議に参加することや、時には開発プロジェクトの視察のために地方の都市に足を運ぶこともあります。そうした場では、自分が「日本代表」となって、カウンターパートの説明を聞いたり、日本の立場や見解を発信したりすることが求められます。責任の大きな仕事で、自分の未熟さを感じることも多いですが、若手職員であっても様々な場面で「日本代表」として活躍する機会があることは、在外公館勤務の魅力の一つだと思います。

日々少しずつ成長を実感

ハイチでの勤務は、初の在外公館勤務ということで、毎日試行錯誤の連続です。特に最初は分からないことばかりでしたが、日々ハイチや自分の業務に関する情報を積極的に集め、自分なりに工夫しながら業務を処理していくことで、少しずつ自分の知識や経験を増やしていくことができました。

また、研修語（フランス語）も外務省に入省してから学び始めましたが、本省やフランスでの語学研修を通じて少しずつ習得することができました。そして現在は、ハイチでの日々の業務のなかで、より実務的なフランス語の習得に努めています。

これからもより一層自己研鑽に励み、自分の語学力や専門知識に磨きをかけていきたいと思います。

Message
入省を希望される方へ

外務省は、やりがいのある仕事と成長できる機会に恵まれた魅力的な職場だと思います。皆さんもぜひ一緒に日本の外交を支えるプロフェッショナルを目指しませんか。

1日のワークスタイル

8:15　出勤

メールや外務本省から届いた電報をチェックするとともに、1日の仕事のスケジュールを確認。また、現地報道に目を通して情報収集。

10:00

日本の支援で購入した医療機材を、現地の病院に引き渡す式典に参加。日本の取組をより多くの人に知ってもらえるよう、式典の様子を撮影し、大使館のホームページ・SNSに投稿。

12:45　昼休み

お弁当を持参し、執務室内で食べることが多い。お昼寝や動画鑑賞など、好きなことをしながらリラックス。

15:00

他の国・機関の経済協力担当者との会合に出席。ハイチにおける国際社会の支援のあり方に関する議論や、各国の支援についての情報共有を行う。

16:45　退勤

自宅に直帰することが多いが、館員や他の国の外交官と一緒にディナーに行くことも。仕事のパフォーマンス向上のためにも、退庁後や週末はなるべくゆっくり過ごすよう心がけている。

研修言語
英語（豪州）

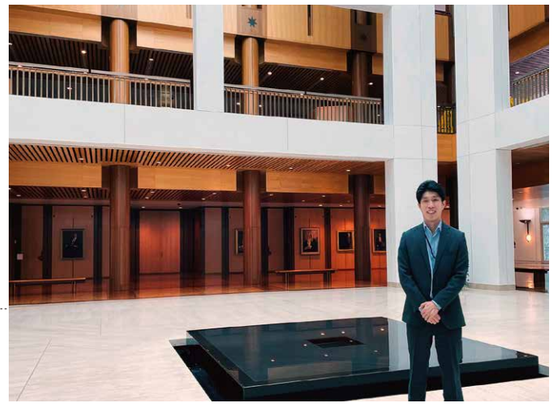
6
年目

在外公館
在オーストラリア日本国大使館　三等書記官

百瀬　州

MOMOSE　Shu

2016年入省。
オーストラリアで在外研修後、
在パラオ日本国大使館で勤務。
2021年から現職。



オセアニア地域でプロフェッショナルへの飛躍に向けた第一歩を踏み出す。

オセアニア地域担当

外務省専門職員が担当する言語は主要なものから馴染みのないものまで、多種多様、多岐にわたります。その中で、私は一番メジャーな英語を研修語として命じられたので、米国か英国に海外研修に行くのだろうと思っていたところ、研修先として指定されたのはまさかのオーストラリア（豪州）！希少な「豪語」研修組として外務省のキャリアをスタートしました。オセアニア地域を所管する大洋州課勤務を経た後、豪州シドニーにて在外研修、在パラオ大使館勤務、そして現在は在豪州大使館で勤務しています。オセアニアづくしですね。オセアニア地域のプロフェッショナルと名乗るには程遠いですが、現在まで、地域集中的なキャリアを築いています。

多様でスケールの大きな仕事

私の「外交官」デビューは太平洋の島国パラオでした。「豪語」研修として任命されたので、てっきり在豪州大使館に赴任すると思いきや、パラオ赴任ということで非常に驚いた覚えがあります。

パラオは人口2万人にも満たない小さな島国ですが、大使館の仕事は、とてもダイナミックで刺激に満ち溢れたものでした。パラオは地政学的な要衝に位置しているほか、台湾国交国でもあり、非常にユニークで興味深く話題に事欠かない国です。また、文化的な側面を見れば、日本と歴史的に深いつながりを有している国でもあります。

小規模公館の大きな利点は、私のような駆け出しであっても、政治、経済、広報文化と多様な分野にわたり活動でき、さらに、各業務の担当官として重責を担えることだと思います。また、小さなコミュニティだからこそ、相手国政府との距離も近く、大統領や大臣とも気楽に話せる関係でした。日本では考えられないですよね。若いうちから多様な経験を積み、責任のある仕事を任されるという意味で、大きく成長・飛躍できる環境だと思います。

新しい発見の毎日

そして在豪州大使館勤務に至ります。広報文化班の一員として、日豪関係の深化を感じながら、忙しくも充実した日々を過ごしています。

研修で2年間を過ごした豪州ですが、自分はこの国のことを何も知らないなと身に染みて思う毎日です。ポジティブに考えれば、まだまだ新しい発見が待っているということでもあります。一つの国・地域・言語に特化して、研修から実務まで一気通貫で鍛えられるのは、外務省専門職員ならではの魅力だと思います。

Message
入省を希望される方へ

外交官に求められる仕事の内容やあり方は刻々と変化しています。従来のやり方に囚われない柔軟な発想を持った皆さんが、外交の舞台で活躍されることを願っています。

1日のワークスタイル

8:30　出勤

メール、電報や新聞を通読。机を整理して勤務時間開始前のウォームアップ。

9:00

勤務時間開始。電話とメールが飛び交い、バタバタと慌ただしくなる。情報収集、資料作成、相手国政府との折衝など日々の業務は千差万別。至急の作業が発生した場合は、同僚と相談して対応。

12:30　昼休み

同僚と外出したり、大使館内のラウンジで現地職員を交えて食事をしたり、一息くつろげる時間。相手国の関係者とランチに出かけることも。

13:30

午前中と同様の業務を続けることも多いが、できるだけ外に出て足で情報を集めることに注力。

19:00　退勤

一日の仕事を片付け、翌日にやるべき作業を確認して退勤。帰宅後は、友人や同僚と街中に出かけたり、趣味に興じたり、リラックスした時間を過ごす。レセプションや会食の機会があれば、相手国関係者や他国の外交官と積極的に交流（個人的には在外勤務の一番の醍醐味！）。

研修言語
朝鮮語

8
年目

本省

大臣官房国際報道官室　事務官

藤澤 葵一

FUJISAWA Kiichi

2014年入省。
韓国で在外研修後、在韓国日本国大使館で勤務。
帰国後、2020年から現職。

好奇心と使命感を力に変え、世界と自分に問い続ける。

提供：聯合ニュース

外交官人生をかけた問い

「朝鮮半島に関する外交のプロになる」。入省以来、その意味を自問し続けています。その答えを見つけ体現するためには外交官人生をかける必要があると思いますが、在韓国日本大使館での勤務は、その道筋を多少なりとも示してくれた時期でした。特に強く感じたのは、日本と朝鮮半島は古来から実に広範かつ密接な関係を有しており、その関係を真に理解するためには必要となる知識が極めて多いこと、朝鮮半島情勢と関連のある国・地域や分野についても理解を深め関係者とコミュニケーションを図ることが大切であり、そのためにはマルチな視野、言語、知見も磨く必要がある、ということ。これらを実践するためには飽くなき好奇心と使命感が求められ、決して容易でないことを日々痛感しています。

似て非なる隣国とのきめ細やかな付き合い

日韓の通訳者の間では「日韓通訳の罠」と呼ばれるものが存在します。文法や語彙が非常に似ているが故にかえって微妙なニュアンスの違いを逃したり誤訳が生じることがある、というものです。実はこうした罠は、言語のみならず、日韓間の相互理解の各所に潜んでいます。類似性には互いの距離を縮める力もありますが、似て非なるものであることを理解しないとより大きな誤解を生む原因となります。朝鮮語研修者の役目は、双方の関係者がかかる罠に陥ることなく、正確な相互理解に基づいて意思疎通や政策立案等を行えるよう手助けすることであると思います。特に通訳者は、発言者の意図を瞬時かつ正確に聞き手に伝える必要があるため、日頃の鍛錬と入念な準備が欠かせません。多様な知見を磨きながら、日本と朝鮮半島（含む北朝鮮）の双方の言葉と深く付き合っていきたいと思います。

国際報道を通じて日本と世界を追い続ける

外務省は様々な形でパブリック・ディプロマシーを実施していますが、国際報道官室では、外国メディアの報道及び動向を分析し、日本の政策・取組・立場等について国際社会からの理解と支持を得るべく、種々の方法で外国メディアへの発信を行っています。外国メディアは各国世論や国際世論の形成に強い影響力を有しており、それらは我が国が外交を行う上で重要な指標・環境となるため、非常にやり甲斐のある仕事です。また、世界中のメディアを通じ日本や世界で日々起きていることを追い続ける中で自ずと視野を広げることができる上、外交の重要な節目に数多く立ち会える等、今後の仕事や人生に役立つ経験ばかりであると感じています。

Message
入省を希望される方へ

外務省の仕事は、毎日大変なことも多いですが、人と関わることが好きで、飽くなき好奇心で常に変化する世界の中を追い続けたいという方、世界各地で多様な経験と価値観を身に付けた同僚と働きたいという方にとっては非常にやり甲斐があると思います。

1日のワークスタイル

9:00　出勤

起床後から登庁までに、日本メディア、欧米メディア、韓国メディアの報道ぶりを概ねチェック。通勤時には、韓国語や英語のニュースを聴きながらシャドーイングを行い、単語や表現も確認。

10:30

毎週火曜日と金曜日は外務大臣定例会見を現場で対応。在京外国メディアから寄せられる各種の照会に対しては、省内の関係部署と調整の上、日本政府の立場を出来るだけタイムリーに発信。

12:30　昼休み

業務の関係で適当に済ませることも多いが、昼休みは貴重なコミュニケーションの機会。なるべく同僚や在京外国メディア等と庁舎外で昼食。

15:00

総理大臣や外務大臣の外国訪問時の対外発信の方針を立て、その準備のために省内外や在外公館と調整。外国訪問時は、現地メディアへのブリーフィング、内外記者会見、インタビュー等を通じ、訪問の意義や成果を積極的に発信。

20:00　退勤

翌日以降の要対応事項を確認し、退庁。業務の状況次第では、退庁時間が遅くなることも。夜に在京外国メディア等と意見交換を行う場合もある。

研修言語
アラビア語

13
年目

本省

経済局政策課資源安全保障室　主査

團　杏奈

DAN Anna

2009年入省。
エジプトで在外研修後、在エジプト日本国大使館で勤務。
帰国後、2021年から現職。

新たな分野での経験は、より広い視点で物事を捉えられるようになるチャンス。

アラビア語専門職としての原点

第一希望だったアラビア語の研修員としてエジプトに赴任し、毎日楽しく過ごしていましたが、2011年2月、いわゆる「アラブの春」といわれる中東の民主化運動の波がエジプトにも押し寄せ、約30年続いたムバラク政権があっけなく崩壊する瞬間を現場で目撃しました。急な政情不安定と治安の悪化で渡航情報（現在の海外安全情報）が引き上げられ、在外研修員である我々も、大使館から在留邦人の方々一人一人に電話をかけて出国の意思を確認するなど奔走しました。その時、邦人保護業務の大切さと外務省員としての責任の重さを痛感したのは忘れられません。「アラブの春」の経験は、その後の私のアラビア語専門職としての原点になっています。歴史的な出来事を内側で経験できることは、外務省の仕事の醍醐味のひとつだと思います。

中東諸国から信頼される日本

産休・育休を挟みながら約4年間勤務した中東第一課では、パレスチナとシリア支援を担当しました。案件の立案・調整の過程や要人往来を通じて実感したのは、日本は、中東地域に負の歴史的遺産を持たず、中・長期的観点から相手国・地域の発展に資する支援案件を実施しており、絶大な信頼を得ているということです。中東和平問題が停滞する中、経済状況が悪化し、若者が将来に希望を見いだしにくい閉塞的なパレスチナ社会。一方のシリア危機は11年目を迎え、国内の経済・社会状況は悪化の一途を辿っており、人道状況の改善が急務です。それぞれ、その時々の国際情勢をみつつ、限られたリソースで最大限の効果を上げるため、関係各所との綿密な調整を要する気の抜けない仕事でしたが、その分、現場を訪れ、日本の支援が実際に現地の人々の役に立っている様子を見た時には、感慨もひとしおでした。

エネルギー安全保障の実現を目指して

現在私は、経済局の資源安全保障室で、国際エネルギー機関（IEA）を担当しています。化石燃料のほとんどを輸入に頼る日本にとって、エネルギー安全保障は死活問題です。特に昨今は、脱炭素社会の実現とエネルギー安全保障の両立が期待され、エネルギー分野は重要な転換点を迎えています。初めて同分野に携わる私は猛勉強の日々ですが、外務省では、様々な分野での経験を経つつキャリアアップしていくことは珍しくありません。日本と各国・国際社会との関係は、政治・経済・文化など幅広く、重層的です。私も新たな分野での経験を通じて、より広い視点で物事を捉えることができるよう、日々精進していきたいと思います。

Message
入省を希望される方へ

国と国の関係は、人と人の関係一つ一つの積み重ねです。そのために、個々は地道な作業も多いですが、だからこそ、それらが大きな成果を生んだ時のやりがいは、大きく感じられる仕事です！

1日のワークスタイル

8:30　出勤

子育て中のため、早出勤務制度を活用中。通勤時間は、新聞を読み、アラビア語ニュースを聴いている。

10:30

在外公館からの電報やメールを確認し、その日の作業計画を立てる。エネルギー分野で注目すべきニュースがあった時には、同僚と相談しつつ対応ぶりや取るべき措置を検討。

12:30　昼休み

貴重な一人時間。なるべく外にランチに出て、気持ちをリフレッシュ。

14:00

IEAとの協議に向けて、対処方針を検討し、資料作り。日本として何を、どのように発信すべきか、関係省庁とも協議しつつじっくりと練り上げていく。

17:15　退勤

急いで子どもを保育園に迎えに行って、帰宅。子どもと一緒に就寝してしまうことも多いが、急を要する仕事があれば、子どもが寝てから作業することも。

日エジプト外相会談で通訳を担当

研修言語
インドネシア語

13年目

本省

国際法局経済条約課　主査

内藤 浩平

NAITO　Kohei

2009年入省。
インドネシアで在外研修後、在インドネシア日本国大使館で勤務。
帰国後、2021年から現職。

初学から総理通訳官へ。「terima kasih（ありがとう）」の気持ちを原動力に。

「0」から「インドネシアの何でも屋」を務めるまでに

インドネシア（尼）語専門職員として、最近４年間、南東アジア第二課尼班で対尼外交政策に携わりました。尼班は、尼の情報収集・分析、政策の企画・立案、要人往来時の会談資料作成・各種調整や通訳、省内外からの照会・相談に対応する、いわば「インドネシアの何でも屋」として省内で頼られる存在です。

「きっと内藤さんは大学で尼語を勉強して、海外経験も豊富で」と予想される方もいると思いますが、私はその真逆です。入省まで尼（語）の知識や海外経験も皆無（更に英語も下位クラス）でした。まさに「0」からの出発でしたが、何でも屋をこなせるようになれたのは、自力では不可能であり、支えてくださる方々に恵まれたからだと実感しています。特に尼語専門職の先輩方の存在は大きなものでした。在尼大使館では、右も左もわからない中、先輩の尼外務省アポに同行して交渉術・社交術を学び、政治家等への情報収集に同行してノウハウや知識を吸収しました。語学面では、しっかり習得できるか不安な中、効果的な研修方法や通訳のコツなどを指導いただきました。また、年次の近い先輩・後輩とは切磋琢磨し、お酒を飲みながら語り合いました。所属部署の上司・同僚や同期、家族や友人、お世話になっている全ての方への「terima kasih（ありがとう）」の気持ちを大切に、日々の業務に勤しんでいます。

「日本代表」としての自覚と責任　通訳官“with corona”

５年以上にわたり総理大臣等の通訳の機会をいただいてきました。首脳会談では、国家の代表の発言を通訳するため、稚拙な訳は許されず、格式高く洗練された訳が求められます。また、通訳官も「日本代表」として同席するため、自覚と責任を持って、謙虚に毎日の研鑽に励み、会談資料を一言一句まで丹念に勉強し、体調管理を徹底して臨む必要があります。その点、新型コロナ禍での2020年１０月の菅総理の尼訪問時の首脳会談は、これまで以上の困難がありました。まず、通訳は実戦感覚が大事ですが、新型コロナで要人会談の頻度が減り、対面通訳としては９ヶ月ぶりのぶっつけ本番となりました。また、マスク着用やアクリル板（遮音効果）など平時とは異なる環境で実施されます。少しでも克服するため、新型コロナ以降は毎日の勉強量を倍にして備え、会談資料もより一層頭に叩き込み、本番のイメトレも入念に行いました。迎えた本番では苦労する場面もありましたが、両首脳だけの一対一の会談で、始めは緊張した雰囲気だったものの、協力案件に合意したとき両首脳から思わず笑みがこぼれて打ち解けた瞬間、大きな感動を覚えました。若くして歴史的な一場面に間近で立ち会えるのも、専門職員としての醍醐味です。

Message
入省を希望される方へ

専門以外にも幅広い経験ができます。以前にODAを担当したほか、現在は経済条約課でEPAを担当し、勉強の毎日です。皆様と「深い専門性」と「広い見識」の二刀流を目指して切磋琢磨できる日を楽しみにしております。

1日のワークスタイル

8:00過ぎ　出勤
通勤中は、尼語や日本語のラジオで通訳トレーニング。早く出勤して、静かなオフィスで、その日の打ち合わせの準備や急ぎの作業を全集中で一気に片付ける。

12:30　昼休み
弁当を持参して、食事後は午後の業務に備えて仮眠をとる。同期や同僚と近くに食事に出ることも。ときには急ぎの作業に対応することもある。

15:00
関係課からの経済連携協定の解釈・運用に関する照会・相談対応や、今後の協定交渉に向けた打ち合わせなどを行う。

20:00　退勤
不急の仕事は翌日に回して出来るだけ早く帰宅。帰路では尼語や英語のラジオをリスニング。帰宅後は娘と遊んだり風呂に入れたり育児・家事に当てる。

テレワーク
業務状況によりテレワーク実施。仕事の流れは変わらないが、仕事の前後に娘を散歩に連れて行ったり、家族で食事をしたりと充実している。

日インドネシア首脳会談で通訳を担当

提供：内閣広報室

研修言語
セルビア・クロアチア語

15年目

在外公館

在クロアチア日本国大使館　二等書記官

大島 千絵

OSHIMA Chie

2007年入省。
クロアチアで在外研修後、在スロベニア日本国大使館、在クロアチア日本国大使館で勤務。帰国後、大臣官房総務課、総合外交政策局人権人道課を経て、2019年から現職。

人に対しても、仕事に対しても誠実に。日々学んで専門性を磨く。

若手でも即戦力。新たな出会いや幅広い学びがある

「外交官にとって重要なことは「誠実さ」。国と国との関係も、人と人との関係が基本となっている。」元々国際的な仕事に関心がありましたが、この先輩外交官の言葉が、専門職員採用試験受験を決めた直接のきっかけです。在外研修後、スロベニア及びクロアチアの大使館で勤務し、その後、外務本省官房総務課及び人権人道課で勤務、現在は、再びクロアチア大使館で主に政務を担当しています。外務省の仕事は多岐にわたり、担当によって扱う事象や求められる専門性も異なりますが、共通して言えることは、若手であっても戦力となることが期待されることです。担当が変わる毎に新たに専門知識を備えるべく勉強すべきことも多いですが、その反面、新たな出会いが多く幅広い学びがあることには、やりがいを感じています。

人々の心に残る瞬間や、二国間の歴史に携われる

大使館で携わった仕事の1つに、2回目のクロアチア勤務時に広報文化担当として従事した外交関係樹立２０周年記念コンサートがあります。同コンサートは秋篠宮同妃両殿下（当時）やクロアチア大統領のご臨席も得て行われましたが、事前調整から当日の準備まで、大使や次席のご指導をいただきつつ、中心となって行いました。当時は目の前のことで精一杯で実感がなかったのですが、６年後、政務担当として再びクロアチアに赴任し、議会関係者や有識者と懇談する中で、複数の人が、２０周年コンサートが非常に印象に残ったと述べていたのを耳にし、誇らしい気持ちになったことを良く覚えています。人々の心に残る瞬間や、二国間関係の歴史に携われることも、この仕事の醍醐味の1つと思います。

意思決定に有益な情報収集や提案を行うために

現在は、日本とクロアチアの関係促進に関する業務や、クロアチアの政治情勢に関する情報収集・分析等を担当しています。在外公館で得られる情報や政府関係者等とのやりとりは、政策や意思決定のベースとなるものです。これはどの業務にも共通しますが、専門職員として質の高い報告や提案を行うためには、普段からアンテナを高く張り、タスクやその背景を良く理解するとともに、現地の情勢や感覚に敏感になり洞察力を深めておくこと、また、様々な意見に触れた上で自分なりの考えをしっかりと持ち、創造力を豊かに保つことが重要です。もちろん、日々の業務やコミュニケーションを行う上でも、語学力を磨くことは欠かせません。私自身、まだまだ未熟ですが、仕事そのものに対しても誠実な姿勢を持ち続け、日々研鑽を積んで行きたいと考えています。

Message
入省を希望される方へ

日本人にも人気の観光地クロアチアですが、初赴任の０８年は旧ユーゴからの独立から２０年足らず、雰囲気も今とは大分違いました。国や社会の発展を肌で感じられることも、地域の専門家ならではの経験と思います。

1日のワークスタイル

8:30　出勤
通勤時間に日本とクロアチアのニュースを聴き、登庁後は外務本省から届いた電報や外部からのメールをチェック。現地紙にも目を通す。

9:30
毎朝実施されている定例の新聞ブリーフィングに参加。その後、外務本省への報告事項につき電報を起案。

12:00　昼休み
コロナ禍ではお弁当を頼むことも多いが、時間が取れれば同僚と外にランチに出ることも。

14:00
クロアチア外務省担当者等とのアポイントや、調査・報告の作成、翌日以降の大使の要人との会談に向けた資料作成等。

19:30　退勤
大使の政府関係者や有識者との公邸会食に同席することも。会食や行事に参加した際には、記録やホームページ記事を作成。行事がない時には、夫や友人と夕食を共にする。

研修制度

充実した研修プログラムで
外交のプロフェッショナルへの道をサポート

専門職員にとって、特に重要なのが語学の習得です。
在外研修を通じて語学をマスターするとともに、関連国・地域に関する知見を深め、外交官として早期に独り立ちすることが求められます。
外務省では職員のために充実した研修制度を設け、その語学力や知見をもって最前線で活躍できる専門職員の育成に力を入れています。

専門職員研修言語

研修期間:2年	英、仏、独、西、露、中、朝鮮、ポルトガル、インドネシア、タイ、モンゴル、マレー、ペルシャ、ウルドゥー、ヒンディー、シンハラ、ミャンマー、ラオス、カンボジア、ベトナム、ベンガル、フィリピノ、イタリア、ギリシャ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、ハンガリー、フィンランド、ルーマニア、ポーランド、ブルガリア、チェコ、スロバキア、オランダ、セルビア、クロアチア、トルコ、ヘブライ、スワヒリ、ウクライナ、スロベニア、トルコ/カザフ
研修期間:3年	アラビア

入省前 → 入省1年目4月~ → 入省2年目4月~ → 入省2年目の夏~

研修言語決定

専門職員は、四十数言語の中から、希望や適性などを考慮して研修言語が割り振られます。

実務研修 語学研修 (1年)

前期研修(4 月)

外務省研修所で実務や教養に関する講義を受けるとともに、研修言語の学習に取り組みます。

実務及び中期研修
(5月～翌年3月頃)

本省内の各課・室に配属され、実務を担当します。同時に 週2回半日の研修言語の語学研修を受けます。

集中研修 (3か月)

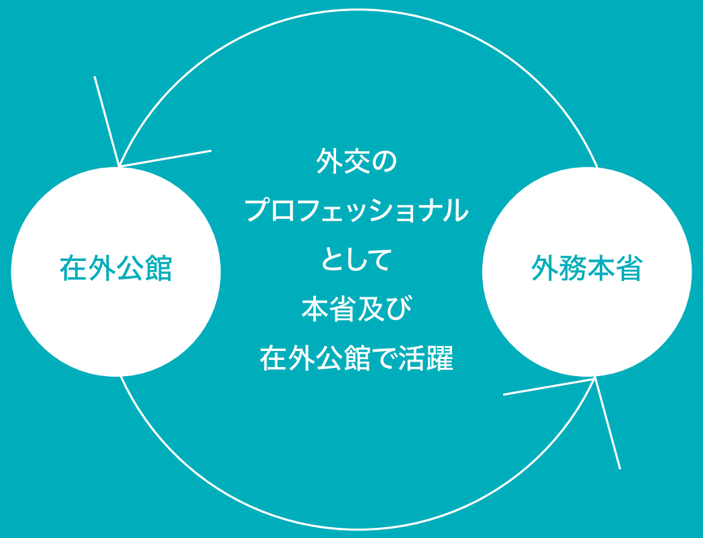
後期研修

外務省研修所で外務講義や研修言語の学習に集中的に取り組みます。

海外研修 (2～3年)

在外研修

現地の大学や語学学校などで研修言語に磨きをかけるとともに、その国の歴史、政治、経済、社会、文化などの諸事情を学びます。



この研修が外交の
プロフェッショナル
としての道の
土台となります

Mission

本省での
仕事を覚える

外交官としての基礎知識を
身に付け、在外研修に備える

専門職員としての
礎を固める
(2～3年)

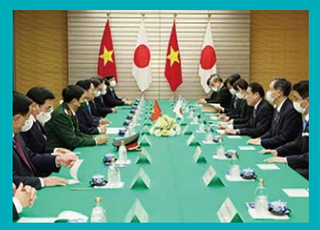
在外研修終了後は、研修国の在外公館で勤務するか、研修言語を国語(または通用語)とする別の国にある在外公館で勤務します。本省に戻ってからは、おおむね5~6年ごとに本省と在外で勤務します。

配属先や転勤について

能力、適応力、勤務成績、本人の希望等を総合的に考慮し、配属先が決定されます。おおむね2～3年ごとに異動があるため、研修言語とその地域への深い関与を軸としつつ、多様な視点から様々な経験を積みながら勤務することができます。さらに、異なる部署や国での勤務を通じ、新たな分野での知見を深め、外交官としての視野を広げていくことも期待されます。
外交のプロフェッショナルへの道は、多くのチャンスと可能性に満ちています。

必要な語学力は

試験科目に外国語試験が課されていますので、一定の外国語能力は必要です。一方で、採用後に充実した研修の機会が与えられますので、採用時点での語学力より、採用後の研鑽によってどれだけ高いレベルを達成できるかが重要です。将来的には、高度な外交交渉や、首脳会談や外相会談等、様々な機会における通訳を務めることが目標とされます。



提供:内閣広報室

在外研修レポート

研修言語 ギリシャ語

2019年入省
在ギリシャ日本国大使館　外交官補

白鳥 洸
SHIRATORI　Ko

街中には、机上の勉強だけでは知りえないことばかり

私は2020年10月からテッサロニキ・アリストテレス大学にある現代ギリシャ語スクールでギリシャ語を学んでいます。首都アテネが古代を象徴する街であるのに対し、第二の都市テッサロニキはビザンティン帝国・オスマン帝国時代の遺跡や建造物で彩られており、バルカン随一の学生街でもあります。ギリシャ語はとても理論的な文法構造をしている一方で、語彙の数が非常に多く、決して簡単に習得できる言語ではありません。しかし英語や、医学など学問的な用語の中にはギリシャ語由来のものも多く、そのような知識と関連付けることで楽しく前向きに学習しています。

授業だけでなく、街の中でしか得られない学びも大切にしています。毎週近所のライキ・アゴラ(青空市場) に出かけ、新鮮な野菜や果物・魚を一週間分買い揃えるのが習慣です。2010年代に経験した財政危機の影響で、ギリシャ人が怠け者であるというイメージが一部存在するかもしれませんが、市場で巧みな売り文句でせっせと商品を捌く勤勉なギリシャ人達を見ると、実際に現地に生活して自分の目で物事を観察する重要性を再認識します。

当初私にとって「パルテノン神殿、エーゲ海、神話」程度の印象でしかなかったこの国が、在外研修が進むにつれて非常に奥深く多種多様な顔を見せてくれます。残りの研修生活も、なるべく机上の勉強だけで終わらせることなく、色々な場所で現地の人々との交流を図ることで、ギリシャについてのプロフェッショナルとしての視点を養っていきたいと思います。

研修言語 カンボジア語

2019年入省
在カンボジア日本国大使館　外交官補

服部 優花
HATTORI　Yuka

現地の人の目を通した世界を見られるようになりたい

現在カンボジアでホームステイをしながら、王立プノンペン大学大学院で言語学、同大学外国語学部で通訳翻訳コースを専攻し、同時に家庭教師2人からカンボジア語を習っています。研修1年目は、公務員養成学校である王立行政学院の国際関係専攻で、将来のカウンターパートとなる同年代のカンボジア人と学び、さらに日本・カンボジア間の文化交流行事等を行う公的機関でのインターンシップも経験しました。大学や大学院で、これからこの国をより良くするにはどうすれば良いか、という思考で学びに来ているカンボジアの若者と机を並べて勉強する日々は、どの瞬間も刺激的です。彼らと交流する中で価値観の違いに驚くことも多々あり、そういう時は相手を理解するため、遠慮せずどんどん話すようにしています。助け合うのが当たり前で、奥ゆかしいけれど、仲良くなるとあれやこれやと世話を焼く文化は新鮮で、ここでの生活は新しい発見の連続です。ホストファミリーと夕食の席で一日の出来事を報告し合ったり、伝統行事の際には歴史から適切な振舞まで教えてもらったりする時間は何にも代えがたく、また異なる発音、語彙を使うファミリー一人一人との会話は語学力の強化に役立っています。今取り組んでいる翻訳練習では、発言の意図を汲み取り、言葉の重みを伝えられるよう意識して訓練しています。現地の人が日々何をどう捉えているのかを理解し、言語を駆使して両国をつなぐ専門家になれるよう、ますます精進していきたいと思います。

研修言語 スワヒリ語

2019年入省
在タンザニア日本国大使館　外交官補

望月 雪絵
MOCHIZUKI　Yukie

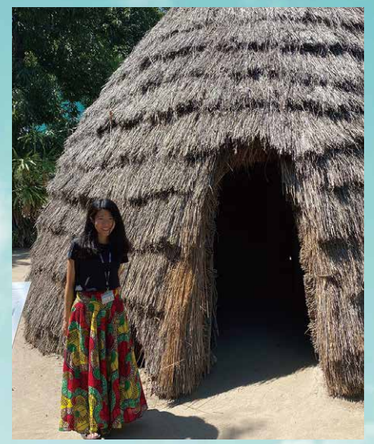
現地での生活の中で語学と社会について学ぶ毎日

スワヒリ語は東アフリカを中心に話されている言語で、私は現在キリマンジャロ山やザンジバル島などで有名なタンザニアで研修を行っています。在外研修1年目は、英国のロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)にて、アフリカ政治を中心に、広くアフリカ全体の文化や言語についても学びました。

2021年8月から、2年目の研修をタンザニアで開始しました。語学面では、とにかくスワヒリ語に触れる時間を増やそうと、ダルエスサラーム大学でのスワヒリ語の授業に加え、外交学校にも通い、他の生徒とのコミュニケーションを図っています。教科書の中だけではない生きたスワヒリ語に触れられるだけでなく、外交に対するタンザニアの学生や先生の考えを知ることができ、充実した毎日を送っています。

タンザニアの人々は助け合いの精神が根付いていて、フレンドリーな人が多い印象があります。私がタンザニアの生活を知りたいと話すと、自宅に招いてくれたり、行きつけのお店に連れて行ってくれたりする人もいて、とてもありがたいです。特に先生の自宅でタンザニア料理を教えてもらった際には、日本食との違いはもちろん、似ているところも発見でき、貴重な経験になりました。このように、現地の人々の助けも借りながら、自分の目でタンザニア社会を見る機会を持ち続けたいと思っています。

今後はスワヒリ語のプロフェッショナルとなり、日本外交に貢献できるよう、残りの研修期間でさらに努力して知見を深めたいです。



研修言語 トルコ語

2019年入省
在イスタンブール総領事館　領事官補

藤森 望
FUJIMORI Nozomu

言語を通じてその背景にある国民性まで知ることが大事

アジアとヨーロッパの狭間に位置するトルコは、その長い歴史の中で様々な宗教や民族の人々が行き交い豊かな文化が育まれてきたとても興味深い国です。私は現在、トルコ最大の都市であるイスタンブールにある大学院でトルコ現代史を専門に勉強しています。大学院では、日本と同じ時期に近代化を経験したトルコの歴史を勉強する際に、日本ではどのような近代化が行われたのか、トルコの近代化との共通点や違いは何かなど、日本人だからこその問いに答えることを通じて改めて日本のことを見つめなおす機会もあります。トルコ語は日本語と文法の構造が比較的似ていることもあり、学習しやすい言語の一つだと思います。昨年夏にイスタンブールで研修をスタートし、まずは語学学校で勉強した後、家庭教師の先生についてもらい一対一で会話の練習に集中的に取り組みました。日々、授業でも授業外でもそれまで知らなかった単語や表現に出会ったときには、必ずメモし辞書をひいて意味を確認するようにすることで語彙を強化するよう努めています。

私は今回初めてトルコに来ましたが、トルコ人は日本人と比べてとても情熱的で人情味に溢れているということ、また自分たちの文化や歴史に非常に強く誇りを持っているということを日々の暮らしや旅行先で現地の人たちと交流する中で感じています。残り1年の研修期間も引き続き一日一日を大切にしながら、語学を中心に専門家になるべく精進してきたいと思っています。

19年目 CAREER PATH

在外公館

在マナウス日本国総領事館　領事

中村 玲子

NAKAMURA　Reiko

様々な角度から携わる日本外交
常に緊張感を持って仕事に臨む。

新しい分野へのチャレンジを通じて自己成長

外務省専門職員と言うと、ずっと同じ専門の部署に配属されるというイメージを持つ方もいらっしゃるかもしれませんが、自分の希望を考慮してもらいながら、数年毎に異動するのが通例です。私は、「国際協力（ODA）」と「広報」に関心があったので、その様な希望を出したところ、国際協力局政策課の広報班に配属され、ODAに関する国民の理解促進のための業務に携わることが出来ました。次に配属された国際原子力協力室は、希望を出しておらず、原子力についての知識も無かったので不安でしたが、原子力協定の運用や交渉、原子力安全関連会合への参加等を通じて、核不拡散や原子力の平和的利用の重要性を改めて感じ、深く考える機会となりました。チェルノブイリ事故から30年目にあたる2016年には同原発を訪問し、事故後の国際社会の対応の現状を目の当たりに出来たことも得難い経験でした。この様に、専門の言語や地域はある一方、幅広い分野で知見を積んでいくことが出来るのもこの仕事の魅力だと感じています。

在外公館勤務としては、ブラジルの公館に計４回勤務しました。多様性に富むブラジルは各地で政治・経済・社会事情が異なり、毎回新しい発見と学びの連続です。在サンパウロ総領事館では、200万人を擁するブラジル日系社会との連携強化に係る業務にも従事しました。特に若い世代の日系人との交流・対話を通じて、今後の日系社会のあり方や日本との関係について考えることが出来たのは、私の軸であるポルトガル語の専門職員としての視野を一層広げる貴重な経験となりました。

問題意識を持つと共に、奮励努力を怠らない

日本の国益にとって自分が今行っている業務はどの様な意義を持つのかという視点を持ち仕事をするように心がけています。日々の業務に追われてしまうと疎かになってしまいがちですが、大局的かつ客観的な視点を持ち業務に取り組むことは重要だと考えています。また、専門の言語・地域に対する探求心と弛まぬ努力も不可欠です。私も日々ポルトガル語の研鑽に努めていますが、いつになっても新しい単語や表現に出会い、語学の奥深さを感じています。

2003　入省

2004
在外研修
（ポルトガル・リスボン）

2006
在マナウス
日本国総領事館副領事
広報文化、政務、経済、
経済協力を担当。

2008
在ブラジル
日本国大使館三等書記官
儀典、内政、法務を担当。

2010
国際協力局政策課事務官
ODAの広報（グローバル・
フェスタ等）を担当。

2014
軍縮不拡散・科学部
不拡散・科学原子力課
国際原子力協力室
事務官（後に主査）
原子力協定の運用・交渉、原
子力安全関連の国際会議を
担当。

2018
在サンパウロ
日本国総領事館領事
総務、政務、ブラジル日系社会
との連携事業を担当。

2020
現職
次席として館内を総括すると共に、
政務、経済、経済協力を担当。

23年目 CAREER PATH

本省

国際協力局地球規模課題総括課　課長補佐

宮武 美穂

MIYATAKE Miho

他では得難い経験が財産となって
常に自分を成長させてくれる職場。

海外で働いてみたいという思いが出発点

学生時代に１年間イギリスに留学し、今度は海外で働いてみたいという思いで就職活動を行いましたが、面接を受けた民間企業からは内定を得られず、失意の底にいた時に、知り合いを通じて外務省専門職員の方の話を聞くことが出来ました。男女に関係なく機会が与えられ、語学を活かした仕事が出来る職場との印象を受けて、一念発起して試験を受けることにしました。

こうして入省した外務省では、フランス語の専門職員として、これまでにフランスとセネガルでの大使館と、西アフリカの国々を担当する地域課、国連の行財政分野の担当課、国際機関の担当課等で勤務してきました。外務省用語で「バイ」（バイラテラルの略で、二国間の意味）と「マルチ」（マルチラテラルの略で、多国間の意味）を良く使いますが、バイ（大使館や地域課）とマルチ（国連・国際機関関係部局）の両方を経験する中で、その都度初めて学ぶことも多く、人事異動の度に一からの勉強でした。そうした苦労も含めて、他では得難い経験の積み重ねにより、常に新たな挑戦をしつつ、与えられた分野でのプロフェッショナルとなることを目指して成長することが可能な職場だと感じています。

ライフステージにあった働き方を目指して

外務省専門職員の仕事に関心はあるけれど、家庭と仕事の両立は出来るのだろうかと不安に思っている方もいるかもしれません。私は二度の育児休業を取得し、今現在も時短勤務をしながら、小学生と幼稚園児の子育てをしています。実際のところ両立は簡単ではなく、奮闘する毎日ですが、テレワークの活用や、周囲の方々の理解と支援を得ながら、家では子供と過ごす時間を大切にしつつ、職場では今の自分にとって最大限のパフォーマンスを示すことが出来るよう努めています。多くのママ省員が省内・在外で活躍していることは、大きな励みであり、時間的な制約がある中で、どうすれば仕事の効率を上げることが出来るか考えながら、ライフステージにあった働き方を目指しています。

1999　入省

2000
在外研修（フランス）
ストラスブールの欧州高等研
究所、政治学院で学ぶ。

2002
在フランス
日本国大使館三等書記官
半年間領事業務に従事した後、
統合班で欧州連合、日仏間の
援助協調等を担当。

2004
在セネガル
日本国大使館三等書記官
経済協力班でセネガルの水・
保健分野、マリの政務・経済協
力全般を担当。

2006
中東アフリカ局
アフリカ第一課事務官
セネガル・マリ・モーリタニア・
カーボヴェルデの国担当とし
て、二国間関係を担当。

2009
総合外交政策局
国連企画調整課事務官
国連行財政委員会の担当とし
て、国連予算交渉と日本の国
連分担金に関する予算要求に
従事しつつ、通訳官として通訳
業務を担当。

提供：内閣広報室

2013
第１子出産
（育児休業３年取得）

2017
大臣官房人事課事務官
（後に課長補佐）
ワークライフバランスに関する
各種制度（テレワーク・フレッ
クスタイム制等）を主に担当。

2020
現職
時短勤務をしつつ、人間の安
全保障・世界銀行を担当。

同年　第２子出産
（育児休業３年取得）

31年目 CAREER PATH

本省

領事局海外邦人安全課邦人テロ対策室　首席事務官

進藤 康治

SHINTO　Yasuharu

研修言語
ベンガル語

専門言語を生かした貢献の縦軸と多彩な業務の横軸。

4度のバングラデシュ在勤で二国間関係に貢献

1994年に初めて赴任してからこれまでに4回、通算17年バングラデシュに在勤し、儀典（大使秘書）、広報文化班長、政務班長、総務・経済・開発協力参事官等様々な役職を経験しました。その中で、キャリアの縦軸となる専門言語の分野では、2005年7月のカレダ・ジア首相訪日の際、及び2010年11月のシェイク・ハシナ首相訪日の際、首脳会談及び天皇陛下ご引見の通訳を担当しました。こうした機会に二国間外交に貢献できるのは、特殊言語専門職員ならではの特権であります。バングラデシュを含め南アジアでは英語の通用度も高いのですが、現地語を通じてしか得られない情報や人脈も多く、特殊語のプロフェッショナルの存在は在外公館の活動において重要な位置を占めています。

米国との文化交流

また南アジア以外では、米国ボストンに在勤し、総務・広報文化班長として、ボストン・レッドソックスでの松坂・岡島両投手の活躍で対日関心が高まる中、北海道・マサチューセッツ、京都・ボストン等の姉妹都市交流促進、歌舞伎デモ、アニメイベント参加等の文化交流に携わりました。

ダッカ襲撃テロ事件を繰り返さないために

2016年7月のバングラデシュにおけるダッカ襲撃テロ事件では、私の親しい友人を含む多数の邦人が犠牲となりました。事件直後、パキスタンのカラチに在勤していた私は、このような被害者を2度と出さないよう、何かをしなければならないと考え、自ら願い出てその年のうちにダッカに4度目の赴任をしました。ODA関係者等日本人の安全対策に携わり、JICAやJETRO、日本人会、商工会、日本人学校などと連携して様々な対策を行ってきました。その結果、在任中、邦人を巻き込む事件が一度も起きなかったことは私の誇りです。そして本年4月に帰国した後も、海外にいる邦人の安全を守ることは、引き続き邦人テロ対策室の首席事務官たる私の主要なミッションであります。ゴルゴ13を起用した安全対策マニュアルなどを用い、海外安全に関する知識の普及に努めています。

1991 入省

1992
在外研修
（インド西ベンガル州
シャンティニケタン）

1994
在バングラデシュ
日本国大使館三等書記官
政務担当として任国の
民主化プロセスを体感。

1999
アジア局南西アジア課
事務官
南アジア周年事業を担当。

2002
本省国内広報課事務官
外務省ホームページなどIT広報を担当。

2004
在バングラデシュ
日本国大使館二等書記官
広報文化担当として現地劇団による「米百俵」公演を実現。ジア首相訪日に際する首脳会談・天皇陛下ご引見通訳を担当。

2008
在ボストン
日本国総領事館領事
広報文化担当として
京都ボストン50周年等を
盛り上げる。

2010
在バングラデシュ
日本国大使館一等書記官
経済・開発協力を担当。ハシナ首相訪日に際する首脳会談・天皇陛下ご引見通訳を担当。

（提供：Daily Star）

2015
在カラチ
日本国総領事館首席領事
次席として，安全対策の傍ら日本週間や大規模企業展示等行事も積極的に実施。

2016
在バングラデシュ
日本国大使館参事官
総務・経済・開発協力参事官として，徹底した安全対策と大規模な経済協力実施に関与。

2021
現職

37年目 CAREER PATH

在外公館

在デンバー日本国総領事館　総領事

三上 陽一

MIKAMI　Yoichi

研修言語
ヘブライ語

「仕事においても勉強したい」との希望がかなえられた職場。

勉強は仕事に役立つ

採用面接で志望動機を問われ、「「仕事においても勉強したい」ので、また、「世界で何が起こっているのか知りたい」ので、外務省を志望します」と答えたのを覚えています。

幸い希望通りヘブライ語の専門職員として採用され、言葉、イスラエル・ユダヤ人の歴史、さらには中東諸事情全般等々について勉強を続けることができました。勉強は仕事にプラスになるのみならず、自分を豊かにしてくれたと感じています。

個人的興味もあり進めていた選挙制度比較の勉強は、後の任地において先方から高い関心を持たれ、有益な意見交換につながりました。ある交渉では先方の交渉団から紹介された本を大変楽しく読み終えました。後に邦訳されベストセラーにもなった「サピエンス全史」のヘブライ語原書でした。

広がりのある仕事にも応えられる専門家を目指す

どの職場においても頼りになる先輩・同僚に恵まれ、常に有益な話を聴くことができました。例えば、最近まで勤務していた在トルコ大使館では、トルコのみならずロシア、中央アジア等について話を聞くことができ、大いに学ぶことができました。外部の研究会に参加する機会を得ることが出来、研究者からも多くを学ぶことができました。友人となった外国の政府関係者等とは連絡を取り続けており、交流が続いています。

2021年秋から在デンバー総領事館で総領事としての勤務を始めました。アメリカ勤務は三度目となりますが、ロッキー山脈地域での勤務は初めてです。新しいチャレンジとなります。総領事館の先輩・同僚から学び、また自ら勉強して新しい仕事に取り組んでいきたいと考えています。アメリカの友人達にも早速連絡し再会を約束しています。

自分が担当する仕事は変化し広がります。引き続きプロフェッショナルとしての自負を持ちつつ、幅を広げられるように努力を続けたいと考えています。採用面接時に述べた希望はかなえられてきていると感じています。

1985 入省

1986
在外研修（イスラエル）
語学学校および
ヘブライ大学で学ぶ。

1988
在イスラエル
日本国大使館三等書記官
経済等を担当。

1990
在ニューヨーク総領事館
副領事
広報・教育交流等を担当。

1993
国際情報局調査室事務官
公開情報の取りまとめ等を
担当。

1997
中近東アフリカ局
中近東第一課
事務官
イスラエルを担当。

1999
在イスラエル日本国大使館
一等書記官
政務班長。

2003
在アメリカ日本国大使館
一等書記官
政務班で中東を担当。

2008
中東アフリカ局中東第一課
課長補佐
中東和平班長として、
中東和平、イスラエルを担当。

2009
国際情報統括官組織
第四国際情報官室
首席事務官

2013
中東アフリカ局中東第一課
地域調整官
マグレブ地域等を担当。

2016
大臣官房文化交流・海外広報課
人物交流室　室長
国費留学生、JETプログラム、
スポーツ交流などの人物交流
事業の促進を担当。

2018
在トルコ大使館
公使参事官
次席として館内の総括業務に
従事。

2021
現職

WORK-LIFE BALANCE

研修言語
ポルトガル語

本省
国際協力局地球規模課題総括課 国際保健政策室　主査

稲葉 大樹
INABA Daiki

環境次第ではなく、自分と周りの意識次第。

２０２０年に第一子が生まれ、その後、国際保健政策室に配属されました。同室は、コロナ禍においては、国際的な新型コロナ対策を中心的に担っており、各種調整のため週末も含め昼夜緊張感の途切れない非常に多忙な日々を送っています。ワークライフバランス（WLB）の実現が最大の課題になっていますが、周りの理解と協力を得ながら、育児との両立を試みています。大変忙しい部署ですが、上司や同僚の理解と協力を得て、約2ヶ月間の育児休業を取得することができました。室でテレワークを推進する雰囲気が醸成され始めており、私自身もテレワークを行うなどして、育休から復帰後も継続的に育児の時間を確保しています。そうした中で、業務の効率化に向けた意識が以前に増して高まり、生産性の向上や無駄な残業ゼロに努めています。自分自身の経験から、どのような環境にいようとも、全体の意識を変えるだけで、WLBを図ることができると強く感じています。私は今、WLBの実現に向けてスタート地点に立っているところです。今後、周囲とともに一層の取組を進め、省全体でのより良いWLB環境の整備に貢献したいです。

研修言語
中国語

在外公館
在上海日本国総領事館　領事

米田 麻衣
MAITA　Mai

仕事だけで１００点より、仕事と家庭で１６０点を目指しました。

現在、中1と小4の二人の子供を上海で国際学校に通わせつつ、日系メーカー駐在員として当地に勤務する夫と二人三脚で仕事と家庭を両立しています。私は入省後３年目に結婚、７年目に出産を経験しました。出産後は十分に仕事ができず悩むこともありましたが、かつて欧州で大使職を務め子供が二人いる女性の大先輩が「仕事だけでなく、仕事と家庭の総合点で頑張ればよい」とアドバイスを下さったことが励みになりました。夫や両親、近所の友人等のサポートも大きな糧となっています。育児をしながら多忙なポストの仕事は難しいと思っていましたが、省内で最も忙しい部署の一つと言われる課室での勤務も経験しました。公私共に周囲に感謝しつつ、仕事一つ一つと丁寧に向き合ってきた結果、今は日本が海外に有する総領事館で最大規模となる在上海日本国総領事館の広報文化部長というポストを任せて頂いています。異なる出身母体の同僚達と知恵を出し合いながら、日本の対中外交の最前線に携われる充実した毎日です。

仕事と家庭生活両立支援の取り組み

育児休業	３歳未満の子を養育するために、3歳の誕生日の前日まで休業できる制度
育児時間	小学校就学前の子を養育するために、1日2時間以内で短時間勤務を認める制度
育児短時間勤務制度	小学校就学前の子を養育するために、週の勤務時間を短縮し、希望する日及び時間帯に勤務することを認める制度
早出遅出勤務制度	小学校就学前の子の養育や放課後児童クラブ等に通う小学生の送迎、要介護者の介護のため、 1日の勤務時間を変更することなく、始業・終業時刻を変更して勤務することを認める制度
配偶者出産休暇	配偶者の出産に伴う入退院の付添い等を行うために認められる休暇
男性職員の育児参加のための休暇	配偶者が出産する場合に、男性職員が育児に参加するために認められる休暇
海外勤務にかかる人事上の工夫	夫婦ともに外務省職員の場合、可能な限り１回は、夫婦で同一または近隣の勤務地となるよう配慮

MESSAGE FROM AMBASSADORS

在キプロス日本国大使館　特命全権大使

関　泉
SEKI　Izumi

研修言語
米語

Career

1981年　入省
2013年　大臣官房儀典調整官
2015年　国際協力局政策課民間援助連携室長
2017年　在ハガッニャ日本国総領事
2020年　現職

国際社会も外交の担い手にも多様性が求められる時代、自分らしく働ける職場

やりがいのある仕事に従事できたことに感謝

私は文化交流を通じて国際理解、平和構築に役立ちたいと外務省に入りました。振り返ると、本省での広報・文化、ユネスコ担当部局を含め11年強、在外で5年半と約17年にわたり広報文化関連業務に従事しました。日本からワシントンへの桜寄贈100周年を祝う「桜祭り」に在米大使館で関われたことは忘れられません。本省地域課では豪州、英国担当を経験し、また2001年米国多発テロ事件を受けて旅券にＩＣチップを入れる国際ルール作りにも、ＮＧＯを通じた紛争地における国際協力にも携わり、全ての経験が今に活きています。

ジェンダー差別の経験なし

現在、東地中海に位置するＥＵ加盟国・キプロス共和国で特命全権大使を務めています。当地に常駐する44か国の大使のうち、女性大使が米、仏、独、印を含め１２名ほどいます。キプロスに展開する国連ＰＫＯの軍司令官もキプロス国会議長も女性。キプロス外務省幹部にも女性が多く、コロナ禍で外交団の活動が殆ど停止した中でも女性大使の会は継続され、女性であることが職務遂行上、非常に役立っています。前職の米領グアムの総領事時代も、グアム選出の米国連邦下院議員、在グアム米軍トップの司令官、知事のいずれも女性で、私が初代の女性総領事として日本から赴任してきたことを皆が喜んでくれました。夫をはじめ家族の理解と協力があったからこそですが、外務本省での経験も含め、女性が活躍できる仕事です。

在ガーナ日本国大使館　特命全権大使

望月 寿信
MOCHIZUKI　Hisanobu

研修言語
デンマーク語

Career

1984年　入省
2012年　在タイ日本国大使館参事官
2015年　アフリカ部アフリカ第二課地域調整官
2018年　大臣官房人事課人事企画官、2019年同調査官
2021年　現職

国際情勢が変遷する中、益々重要となる外務省専門職員の役割と可能性

本省と在外で経験を積み管理職への道も！

国際情勢の変遷と多様な外交課題に対応すべく、外務省専門職員に求められる役割は益々重要なものとなっています。専門語学を駆使した地域の専門家に留まらず、特定分野の業務に携わる機能局配置等を含め多くの経験を積むことで、管理職ポストへの道も開かれています。私の場合、専門は北欧語ですが、本省および在外において開発援助や国際機関との連携／調整を中心とする業務に就く機会が多く、デンマークだけでなく、パキスタン、オーストリア、ガーナ、タイと様々な国に赴任しました。全て家族連れでしたが、子供たちは逞しく成長し、特に途上国在勤中の親子助け合いの日々は思い出深いです。2021年１０月、特命全権大使を命ぜられ、全く予期していませんでしたが、２回目のガーナ赴任です。野口英世博士が黄熱病の研究中に亡くなられた地、アフリカの感染症研究拠点（野口記念医学研究所）、大使館現地職員が大統領になった国など話題には事欠きません。北欧公館の外交官とはデンマーク語で情報交換をしています。外務省勤務の醍醐味は、多様な業務機会、先進国と途上国双方の在外赴任だと思います。このような経験は、国内官庁や民間企業をはじめ他の仕事ではなかなか味わえません。与えられたポストで全力を尽くすことにより、様々な可能性が広がります。多くの方が外務省専門職員を志して下さることを心より祈念します。

人事担当者からのメッセージ

不断の努力の積み重ねが外交を支える力となる

外務省は、平和で安全な国際社会を維持するとともに、良好な国際環境を整備し、対外関係を発展させて、日本及び国民の利益を確保・増進することを任務としています。その任務を果たすため、外務省員は、複雑で変化の激しい国際社会の中でいかに日本の安全と繁栄を確保し、国民の生命と財産を守るのか、日本が国際社会の一員としてその責務をいかに果たせるのかを常に考え、直面する課題・問題に対処しています。それは一朝一夕で行える仕事ではありません。一人ひとりの不断の努力の積み重ねが、日本外交を支える力となります。

「人と人」の関係が外交の土台

外務省専門職員は、外務省員約6,300名のうち、約1,750名を数えます。入省に際して、四十数言語の中から専門とする外国語を割り振られ、その外国語を駆使して職務を遂行し、国や地域、そして幅広い外交分野への深い知見を生かし、プロフェッショナルな外交官としての道を歩んでいきます。相手国・地域との強い信頼関係を構築するには、深い理解と経験が必要です。世界各地の現場で、真摯に、誠実に、全人格をもって「人と人」の関係を築いていくことは、職員一人ひとりの大きな財産になり、ひいては、日本外交の確固たる土台となります。

気概と逞しさ、そして熱意が日本外交の推進力

外務省専門職員は一定の間隔で日本勤務と在外勤務を繰り返します。この豊富な勤務経験が国・地域についての洞察力を高めます。内外の情勢の変化に的確に対応していくためには、これまでよりも多様な分野で一層レベルの高い知見を持つことが外務省専門職員に求められます。そうした変化や多様性に果敢にチャレンジする気概、どのような状況・環境でも前向きに取り組む逞しさ、国と国民のために尽くそうとする熱意が、日本外交の推進力となっています。

私の経験から

私は、大学で学んだ外国語（ドイツ語）を研修言語として命じられ、これまでドイツ語圏の在外公館で勤務してきましたが、本省では、経済協力、原子力、国際法といった分野や、外交政策全般やアジアと欧州をつなぐ対話の枠組みに関連する業務も経験しました。特に情報収集や外交交渉において、最後に物を言ったのは、相手との人間関係です。国と国との関係である外交を支えるのは、結局のところ、人と人との絆です。世界は今、時代を画する変化の中にあり、日本を取り巻く安全保障環境も格段に早いスピードで厳しさと不確実性を増しています。激動する国際情勢の中で、私たちと一緒に外交のプロフェッショナルへの道を歩みませんか。

大臣官房人事課　調査官
森 万希子
MORI Makiko

渡部 春妃

ロシア語
欧州局ロシア課日露経済室

日露関係の中でも、とりわけ経済分野は現在進行形の案件が多く、日々更新されていく情報に追いつくだけでも大変です。他方、先輩方の丁寧な指導の下、自身の担当案件について勉強する毎日はとても刺激的でもあります。語学は入省前から苦手で、合格できたことが自分でも不思議なほどですが、来年からの在外研修に向けて努力を続けたいと思います。

大矢 純

ペルシャ語
総合外交政策局安全保障政策課
宇宙・海洋安全保障政策室

実務では、宇宙・海洋という広い視点から外交に携わる部署で、様々なバックグラウンドを持つプロフェッショナルな先輩方と働くことを通じ、仕事のやり方や外交に関する新たな知見を学んでいます。また、入省して初めて学ぶこととなったペルシャ語の研鑽にも日々励むなど、常に吸収することを大切にしています。入省以降、毎日が新たな学びの連続です。

山口 久美子

ベトナム語
前期　国際協力局地球規模課題総括課
　　専門機関室
後期　南部アジア部南東アジア第一課

私は民間で社会人を経験してからの受験でしたが、学歴や職歴を問わない門戸の広さも外務省専門職員採用試験の魅力です。ベトナム語は挨拶も知らないほどでしたが、マンツーマンの授業で楽しく学びながら、少しずつ会話ができるようになっているのを実感しています。今後益々の発展が期待される日越関係を支えられるよう、来年からの在外研修も頑張ります。

湯川 柊哉

スペイン語
前期　経済局国際経済課（欧州連合経済室、
　　経済協力開発機構室）
後期　国際協力局地球環境課

中学時代、「四海兄弟」という言葉に惹かれ、将来の目標として卒業文集に書きました。その実現に向けたスタート地点に立てたことを嬉しく思います。初学者として、週2回スペイン語を学びながら、最初の半年はOECD関連、現在は地球環境分野の部署で実務研修に従事しています。先輩方の温かいご指導のもと、日本外交を支える縁の下の力持ちとなれるよう精進していきます。

採用情報

■ 外務省専門職員採用試験

- 第一次試験・・・ 筆記試験（国際法、憲法か経済学のうちいずれか1科目（選択制）、基礎能力、時事論文、外国語和訳、和文外国語訳）
- 第二次試験・・・ 人物試験（個別面接、グループ討議）、外国語会話試験、身体検査

■ 採用までのスケジュール

3月下旬～4月上旬	6月中旬	7月下旬～8月上旬	8月下旬
申込受付	第一次試験	第二次試験	最終合格発表

～外務省では、専門職員の他に、総合職、一般職の職員等の採用を行っています～

- 総合職　様々な地域・分野での仕事を経験して、管理職さらには幹部職員として活躍することが期待されています。
- 一般職　会計、文書管理、通信事務、領事事務、在外公館施設管理などの業務を通じ、国内外で日本外交を支えます。

◀各種採用の最新・詳細情報はこちら　https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/saiyo/index.html
学生向けTwitterはこちら　https://twitter.com/mofa_student▶